

植物を
編む

—暮らしの中の編組—

2017. 12. 2 土 — 2018. 4. 8 日

パンフレット

Plant fiber weaving ~Weaving for daily life~

植物から生まれる編組品

昭和 30 年代の高度経済成長期になると、大量生産された安価なプラスチック製品は瞬く間に人々の暮らしに浸透していきました。その結果、編組品は急速に衰退し、職人たちは転廃業を余儀なくされました。

しかし、秋田県内各地に伝承されてきた様々な編組品とその伝統的な技術は、本県の工芸技術の基盤をなすもののひとつといえます。各地に伝わる技術の記録保存、関係資料の収集・保存・活用のため、秋田県立博物館工芸部門では、平成 26 年度から県内の編組品の調査・研究を行ってきました。

かつての暮らしの中で培われ息づいてきた編組品とはどのようなものであったのか、写真とともに振り返ります。



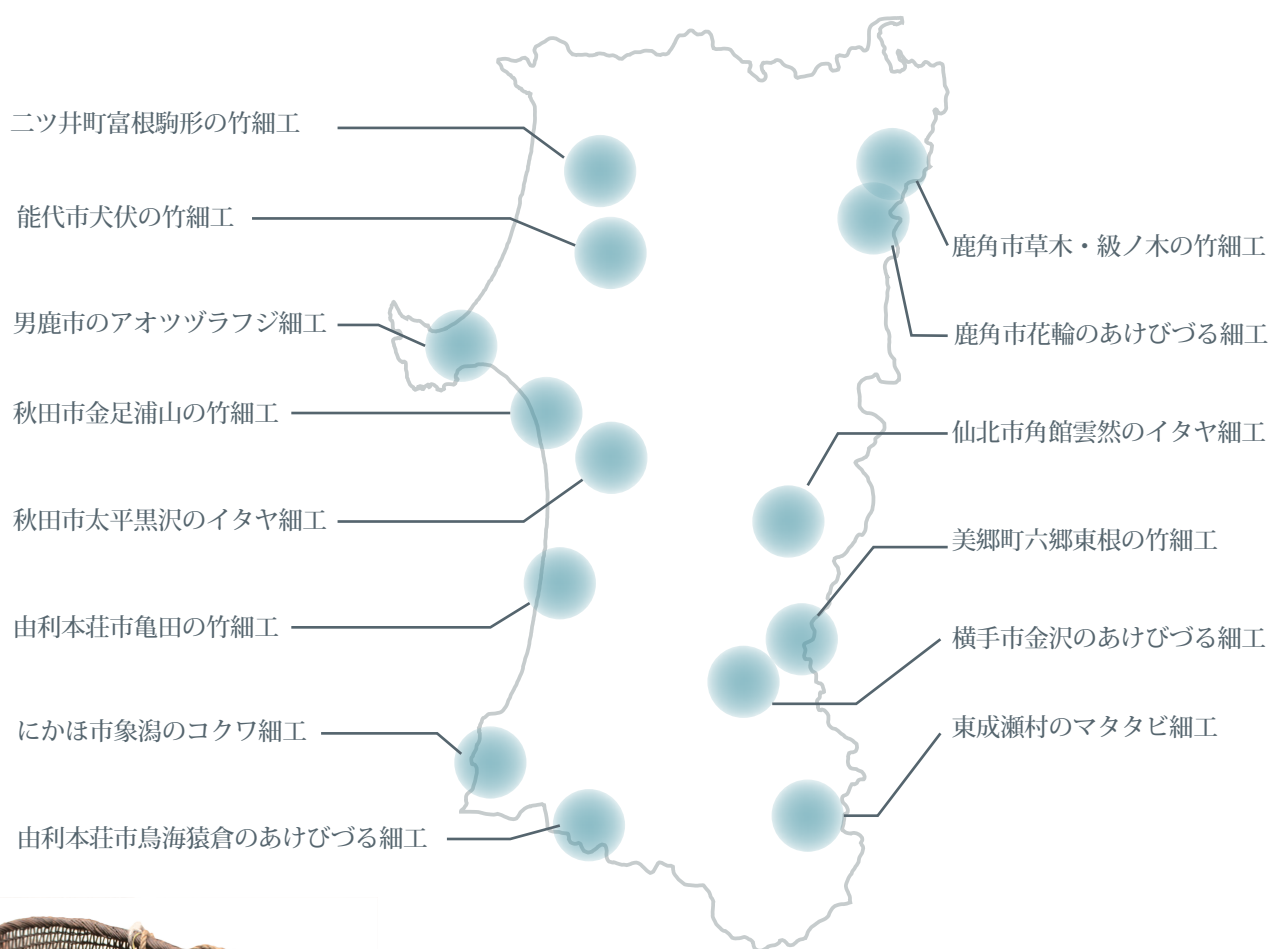
あきたの編組

編組品は、もともと自給自足の生活の中で自家生産されたものでした。やがて地域によって専業あるいは副業として、編組品製作に携わる職人が現れます。

『秋田県史』（1962）によると、昭和 30 年代には代表的な生産地として、鹿角市草木、六郷町東根、岩城町亀田、秋田市金足浦山、鹿角市花輪、鳥海町猿倉、横手市金沢、二ツ井町富根駒形、計 8 地域があげられています。詳しい経緯は不明ですが、素材や販路の確保、技術の継承などの条件が揃った地域で、編組品が産業として発展したと考えられます。

本県における編組品には、秋田の気候・風土や製作に当たる職人たちの姿がにじみでています。

秋田県内における編組品の主な産地



ショイコダシ

かつての秋田では、多くの職人が編組品を製作し、人々の暮らしを支えてきました。しかし、現在秋田県で生業として編組品を製作しているのは、中川原信一氏ただ一人となっています。

約 70 年以上前、父である中川原十郎によって製作されたこのショイコダシは、今でも信一氏が素材採集の時に背負い、アケビヅルやキノコなど様々な山の恵みを運ぶ現役の編組品です。

信一氏は入山と下山時には、必ず山に一礼します。

技術やモノだけでなく、自然に感謝し自然とともに生きる精神性も信一氏に伝えられています。



あけびづる細工職人 中川原 信一氏

竹細工

秋田市金足浦山

かつては八郎潟の漁業を支える道具として、浦山の竹細工が活躍しました。ザルとドジョウドが主力製品で、ザルは「浦山のざるっこ」という愛称で親しまれました。旧昭和町（現潟上市）大久保では、八郎潟の豊富な水産資源を基に佃煮製造が盛んに行われており、そこでは「浦山のざるっこ」が大量に使用されたことがわかっています。またドジョウドは八郎潟だけでなく秋田県内全域で需要がありました。



浦山のざるっこ

芯がネマガリダケ、中身の縦ヒゴ、横ヒゴがヤダケ、縁がアズマネザサで編まれています。多くの需要に応えるためには、素材の確保が重要な課題でした。そこで編み出されたのが、何種類かの素材を組み合わせる方法です。混成型製品にすることによって、材料を調達しやすくしたものと考えられます。



近隣のヤダケを採集



ドジョウド

近年のドジョウドは、近隣のヤダケのみを用いて、仕上げています。しかし、かつてドジョウドは、野山竹とササダケを使っていたことがわかっています。地元の植生や、素材の特性から考えて、縦ひごに使っていた野山竹はアズマネザサ、横ひごに使っていたササダケはチマキザサ、もしくはクマイザサと推定されます。時代によって、入手しやすい素材で、製作していたことがわかります。



アギ

ドジョウドの中には、入り込んだ魚が逃げ出していけないように返しがついています。初めにアギと呼ばれる型を使い、返しの部分から編み始めます。

鹿角市草木・綴ノ木

八幡平や十和田湖周辺に豊富に自生するネマガリダケを素材とし、ドジョウドやリングカゴ、ザルなど様々なものが製作されました。職人は製作のみならず、自ら朝市などに出向いての販売も行いました。鹿角で生産されたザルは「ギブスザル」と呼ばれ、中身はござ目編み、縁はグミ編みで編まれ、形は全体的に浅く大きめ、ヒゴは太めに加工されているのが特徴です。縦ヒゴ、横ヒゴ、縁ヒゴはあえて同じくらの太さにすることで、様々な用途に耐え、壊れにくくする工夫が施されています。



ギブスザル

各家庭ではギブスザルを何枚も所有し、米を研ぐのはもちろんのこと、しいたけの天日干しや麺の水切り、山菜を茹でて干す時にも使いました。縦ヒゴ、横ヒゴ、縁ヒゴ全てが同じ幅の太さに揃えられているのは、壊れにくくするための職人の工夫です。



紫紺染 大樹絞絹襦袢



鹿角の伝統工芸である紫根染、茜染の作業工程においても、ギブスザルが用いられており、日用品から作業用具まで、幅広い用途でギブスザルが使用されていたことがわかります。

美郷町（旧六郷町）東根

美郷町（旧六郷町）東根地区は奥羽山脈の山麓に位置します。奥羽山脈に豊富に自生するネマガリダケを利用し、農家の副業として竹細工が盛んに営まれました。特に「六郷ザル」という愛称で人々に親しまれた米あげザルが多く生産されました。昭和 25～26年頃には、約 30 人の職人が竹細工の生産を続けていたと記録に残っていますが、現在は製作を行っている職人はいません。



六郷ザル

すべてネマガリダケで製作されています。三升揚げ、五升揚げの大きさの六郷ザルが多く生産されました。価格は 1,500～2,000 円でした。



六郷ザル 編み見本

初めは中心部から左の方へ編み進め、次に右の口方向へ編みます。



製作道具

割った竹の肉をとる道具と、ヒゴの幅を均一にする道具。
家の柱や欠けた刃物などを組み合わせて作った自家製の道具です。



製作道具

ナタでヒゴを削ぐときに使う道具。ソリの足を再利用しています。膝の上に乗せて使用します。

縦ヒゴを薄くするときに使う道具。

製作する山藤 イマ氏

この地域では技術の消滅が懸念されましたが、かつてザルを 40 年以上にわたって製作していた山藤イマ氏に出会うことができました。今回、実際に技術の再現を行ってもらうことで、六郷ザルの製作技術を明らかにすることができました。

由利本荘市（旧岩城町）亀田

由利本荘市岩城町亀田では、かつて竹細工が盛んに作られた地域です。「秋田県諸職調査」によると、江戸時代に岩城氏が入部し、高城山に城を築いた際にヤダケを植え込み、それが竹材に利用されたという伝承があります。細工には高城山のヤダケに加え、マダケも使われています。細い編み目部分にはヤダケというように、植物の特性に応じて技法を使い分ける工夫も見られます。



亀田の米あげ

ヤダケで製作されたこのザルは、「亀田の米あげ」という愛称で親しまれました。耐久性に優れ、壊れにくいことから大変人気だったことがわかっています。



製作道具

ヒゴの幅を揃える道具や、底の丸みを出すために使う道具。
道具は壊れたものを再利用したりして手作りしていました。

あけびづる細工

横手市

横手のあけびづる細工は、もともと旧仙南村（現美郷町）野際に伝わる伝統の技術です。昭和 25 年（1950）には 24 軒 29 人の職人が野際であけびづる細工に従事し、日用品を生産していました。しかし昭和 36 年以降、仙南村において稲作が行われるようになると、労働力は新田開発に向けられ、またプラスチック製品の普及に伴い作り手は激減しました。その後平成元年頃には 5 軒ほどの農家が、副業として製作を続けていましたが、現在、生業として製作を続けているのは、中川原信一氏ただ一人となっています。



中川原 十郎氏



中川原 十郎氏制作 手カゴ

底がござ目編み、胴がこだし編み、縁が矢筈巻と、どのような形のもので編み目は同じであるのが特徴です。



あけびづる細工職人 中川原 信一氏

信一氏の父、十郎氏（1918~1998）は野際に 9 人兄弟の 8 番目として生まれました。家族全員があけびづる細工に携わっていましたが兄弟の中でも一番手が器用で、小学校卒業と同時に本格的に製作にも携わっていきます。やがて横手市金沢の中川原家に婿に入った十郎氏は、ここであけびづる細工を生業とする決意をします。

材料の入手から製作に至るまですべて一人で行い、丹念なものづくりの姿勢と作品の造形的な美しさ、確かな技術は多くの人々から評価されました。現在では十郎氏の息子、信一氏が父から受け継いだ技術と独自の美意識を融合させて、小さいかご、マガジンラック、脱衣カゴ、手提げカゴなど時代の要に合ったものを製作しています。

由利本荘市（旧鳥海町）猿倉

由利本荘市鳥海町猿倉地区では、古くから近隣に豊富に自生するあけびづるを利用して、コダシなどの生活用品の生産が行われてきました。

あけびづる細工は、編む時に木の型を使う方法と、型を使わずに手の力のみで成形していく方法の 2 種類があります。猿倉では底にのみ、型である「下板」を使うのが特徴です。下板を底に固定することで、形がくずれずに綺麗に編むことができます。



金浦の市で自らの作品を販売する 村上 房子氏



小物入れ

100 年以上前に作られたカゴです。白い芯で編まれましたが、年月とともに味わい深い色に変化しています。

蔓を煮て柔らかくしてから皮を剥ぐと、細く白い芯が残ります。それをヒゴとして編んでいくのが猿倉の特徴です。

毎年 4 月 1 日には金浦の市日があります。鳥海猿倉の人々は、魚介と物々交換するために編組品を冬の間にたくさん製作したといいます。



下板

下板のサイズは様々で、それによってカゴの大きさが決まります。

鹿角市花輪

鹿角市花輪地区では、日露戦争で戦死した遺族の生計の一助にするための事業のひとつとして、あけびづる細工が始められました。明治 38 年 (1905) には技術先端地の弘前から講師を招き、殖産事業として技術者の養成に力を入れました。大正時代には、販路は関西地方から、更にはアメリカまで広がるなど、海外への輸出品としても大変需要の高いものでした。



バスケット

青森のあけびづる細工は型を使い、ふしや皮を手製の機械できれいに除いて均等に仕上げ編み込みます。鹿角のあけびづる細工も青森と同じ機械を用いて美しいバスケットリーを製作しているのが、現存する資料からもわかります。



ふしとり

あけびづるには節があり、はさみで刈り取るケースが多いのですが、大量生産を狩野にするために手製の機械が導入されました。



しんとり

あけびづるを、なめらかで均一な太さのヒゴとして加工していたことが分かります。



あけびづる細工の型

型を使う編み方は、弘前のあけびづる細工の特徴です。職人による編みムラをなくし、均整のとれた美しいバスケットを作ることができます。



しんとりの使い方

アケビの蔓を機械の中に通し、手前に勢いよく引っ張ることで、同じ太さのヒゴを加工することができました。

ミツバアケビ

あけびづる細工は、材料がミツバアケビ (三葉木通) かゴヨウアケビ (五葉木通) か、型を使うか使わないかといった違いがあります。地域で採れる材料や伝統の製法によって地域差がありますが、秋田県ではミツバアケビを素材として作られています。特に雪の多い地域で育ったミツバアケビは、強靱でしなり強い性質のため、長持ちするといわれています。



ミツバアケビの花



ミツバアケビの実

実や芽は食用として、蔓は薬用や編組品として、様々な形で生活に役立ってきました。



ミツバアケビの葉

小葉が3枚なのでミツバアケビと呼ばれます。小葉が5枚なのはゴヨウアケビです。

コクワ細工

にかほ市 (旧象潟町)

旧象潟町は秋田県南部沿岸に位置し、気候が温暖で暖地性の植物が多いことが特徴です。この地域ではかつてコクワ細工が営まれていました。山で真っ直ぐに育ったコクワ（サルナシ）を見つけ、3年以上かけて育てあげます。そのため職人の間では「山ごしらえ3年」という言葉があります。

育てた蔓は葉が落ちてから刈り取り、皮を剥いで火に炙りながら曲げることで、様々な細工物を製作してきました。製作道具はナタの他に皮ムキ小刀、ツルサキとよばれる専用の道具に加え、上部や底の大きさを決めるために使用する型もあります。



花カゴ

仏壇に供える花器として注文を受け、制作されました。

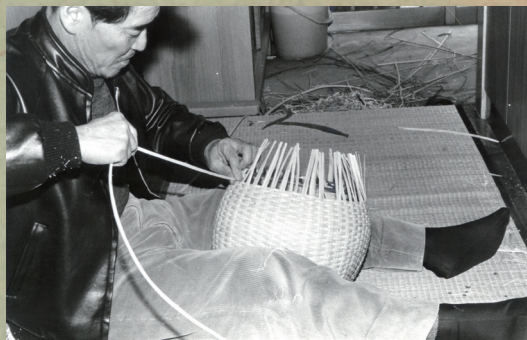


コダシ

山仕事の際の道具や収穫した山菜を入れたりする運搬具。紐で腰に縛って使います。



ビク



昭和50年代撮影 今井帝次氏

今井帝次氏は愛媛県生まれ。秋田に縁あって居住し、コクワ細工の製作にあたりました。旧象潟町で昔から作られていたコクワ細工に義父が携わっており、見よう見まねで作り始めるようになりました。

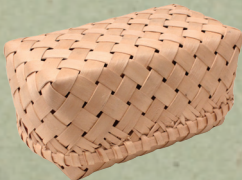
イタヤ細工

仙北市 (旧角館町)

旧角館町雲然地区では、秋田県南部内陸の広い穀倉地帯を背景に、昔から農作業にかかわるイタヤ細工の技法が伝承され、箕、カッコベ（腰カゴ）やオボケ（端布入れ）などの生活用具が主に製作されました。素材となるのはイタヤカエデの中でもアカイタヤで、その若木の根元1mほどを使います。それをナタで均等に割って幅をそろえ、更に年輪にそって1枚ずつ剥いでいくことで、帯状の編み材を取り出します。近年では需要に応じて様々な用途のものが製作されています。



A4 ショルダー



おにぎり入れ



クラッチバッグ



腰カゴ



イタヤのヒゴ

幅広の帯状に加工します。ヒゴが幅広であることから、網代編みや四つ目編みが多く見られます。



ヒゴを加工する様子

専用の道具を使ってヒゴを加工していきます。

マタタビ細工

東成瀬村

東成瀬村では、かつてマタタビ細工が盛んで、ザルやビク、カゴなどの生活用品が製作されてきました。基本的には自家生産・自家消費のスタイルで、余剰分を地元周辺の小さな範囲で販売するくらいで、流通はあまりしていなかったようです。

東成瀬村は奥羽山脈の麓、山あいの地域であり、少し足をのばせば、ネマガリダケ、ミツバアケビ、ヤマブドウなど様々な素材が入手可能です。しかし人々が選択したのは、家のすぐそばに生い茂っていたマタタビでした。このように植物素材の選び方にも地域的な特性、伝統を知ることができます。

マタタビ細工 —素材加工手順—



①小刀で樹皮をはく。



②専用の道具で蔓を4〜6分割に割っていく。道具はイタヤカエデで作られている。



③蔓の内側には肉が残る。



④肉の内側に残った繊維を小刀を使って削ぎ落としていく。



ビク



丸ザル



ザル



六つ目カゴ

本県ではかつてより旧鳥海町、旧象潟町において、マタタビ細工が生産されていたのが知られています。しかし今回の企画展の調査において、東成瀬村もその産地であることが分かりました。東成瀬村では、1年目の真っ直ぐ地に生えたマタタビのつるを選び、採集後すぐに専用の道具を使ってつるを割ります。すると美しく白い肌が表れ、それを編みヒゴとして、かつてはざるやびく、丸かごなど様々なものが作られていました。販路は拡大せず地域のみ販売生産であったことが、これまであまり知られてこなかった理由のひとつと考えられます。



製作道具



製作風景

素材となる植物

形づくる技術

秋田県は日本列島の中でも北に位置し、雪が多く寒冷な気候条件であり、温暖な地域に分布する竹類は自然には生育しません。編組品の材料として使用されるのは、ササダケと総称されるネマガリダケ、ヤダケ、アズマネザサ、またヤマブドウ、ミツバアケビ、イタヤカエデなどです。実際に地域に散見される編組品の素材と植生は合致していることから、昔から生活圏内で採集できる素材を使って日用品を製作していたことがわかります。



アズマネザサ

タケの皮（稈鞘）と葉は、無毛であるため触るとスベスベしています。しなやかで柔らかく、稈には虎模様のような茶色い模様があるのが特徴です。1年生のアズマネザサを採集します。



チシマザサ

積雪量 75 cm以上の地域に自生するササダケで、ネマガリダケとも呼ばれます。その名の通り根元が曲がっているのが特徴です。2～3年生のものを使用しますが、縁には1年生のものを選ぶ場合もあります。稈が硬いため、乾燥しないように保管します。標高の高い所に生えたものが質が良いとされています。

ヤダケ

タケの皮には細かい刺状の毛が生えており、上から下へ撫でると、ひっかかるようにザラザラしています。かつては弓矢の矢柄として使われた程、真っ直ぐ長く成長するのが特徴です。1年生で、長く真っ直ぐに伸びたものを11月に採集しました。乾燥させてから割ります。

タケの年齢



1年生



2年生



3年生

タケの年齢は節から出た枝の分れ方によって判断することができます。小枝は1年ごとに新しく成長を繰り返すので、葉の落ちた枝先を数えるとササダケの年齢がわかります。種類にもよりますが、ササダケは1年目で最大の長さまで達し、年数を経るほど節から枝を伸ばし、稈は固く引き締まっています。

ヤマブドウ

周辺の木々に巻き付いて成長していきます。1年のうち梅雨の時期、2週間ほどの期間しか採取できません。更に、採集した時と同じ位の蔓の太さまで育つのに、数十年かかるため、ヤマブドウの皮は大変希少といわれています。

栗の花が咲く頃が、採集する目安の時期とされています。樹皮は鬼皮、外皮、内皮の3重構造であり、編組品には鬼皮を剥いだ外皮と内皮の部分を使います。皮を剥いで1ヶ月ほどは乾燥させます。



ヤマブドウの花



ヤマブドウの実

ミツバアケビ



ミツバアケビの花



ミツバアケビの実

アケビ類のうち、秋田で自生しているのはミツバアケビで、アゲビ、アギンビなどの名で親しまれています。ミツバアケビとは、一枚の葉が三枚の小葉からできているのでこう呼ばれています。木に絡む蔓ではなく、地を這うまっすぐに伸びたものを選別します。これを春、そして9月から雪が降るまでの時期に収穫します。

アオツツラフジ

アオツツラフジは、やぶに絡まって成長する蔓性の多年草です。かつてはこの丈夫な蔓を使って葛籠などが作られました。県内では主に沿岸部に生育しているのがみられます。



アオツツラフジの実



アオツツラフジの花

マタタビ



マタタビの花



マタタビの実

猫が好むことで有名なマタタビも編組品の素材となります。長く伸びた蔓を素材として使います。マタタビの葉は夏には白化するため、非常に見つけやすいのが特徴です。12月に一度雪が降って、蔓がしまった時期を狙い採集します。葉を落とし、樹皮を削いでから専用の道具で割っていきます。

サルナシ

別名コクワとも言います。キウイフルーツに似た実をつける植物ですが、その蔓が編組品の素材となります。蔓は非常に丈夫なことから、吊り橋の材料にも使われるほどです。一見ヤマブドウの蔓と間違えやすいですが、ヤマブドウの黒褐色に比べ薄い色をしています。



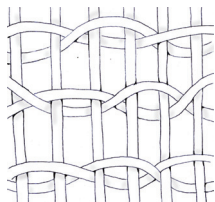
サルナシの花



サルナシの実

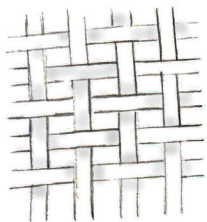
適切な時期と方法によって採集された植物は、その後下処理が行われ、編み材として加工されます。下処理の方法は植物によって異なり、葉や根を取り除き、乾燥させたり、採集してすぐに割ってしまったりと様々です。その最適な方法は、長い年月によって培われてきた先人の知恵でもあります。

こだし編み



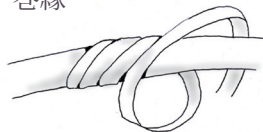
縦芯2本を1組に、横芯を2本縄編みにしていく技法。
あけびづる細工などによくみられる。

四つ目編み



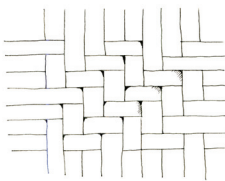
縦と横の編み目が単純に交差して構成され、隙間の多くあいた編み方。

巻縁



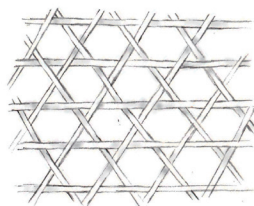
芯にクルクルと巻き付けていくだけの、シンプルな縁巻きの技法。
全国で一番多く採用されている技法。

網代編み



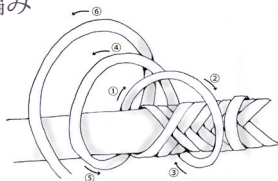
板状にしたヒゴを2本飛ばし、あるいは3本飛ばしにしながら編んでいく技法。階段のような模様が特徴。
隙間の少ない密な編み方。ものを通したくないときに選択される。

六つ目編み



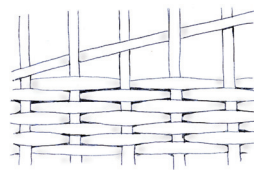
六角形の隙間があく編み方。六角編みや亀甲編み、籠編みなどとも呼ばれる。
6本のヒゴを斜めに組み、中心から外に編み進める。

ゲミ編み



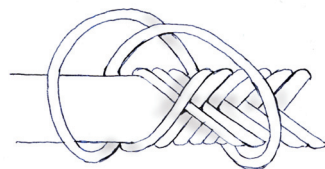
矢筈巻の上に、一定の間隔で更に巻き締めも施す編み方。秋田県では「ゲミ編み」と呼ぶ地方が多い。三つ編みを思わせる外観からそう呼ばれたものと考えられる。

ござ目編み



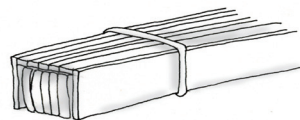
編み目がゴザに似ているので、ござ目編みと呼ばれる。
縦ヒゴは一定間隔に置き、横ヒゴは間隔を詰めて編む。

矢筈巻



8の字を描くように縁を巻く技法。
密に編むことで強度が出る。

当縁



板状に加工したヒゴを重ね、その上に見栄えをよくするために更に細いヒゴを重ねている。太い程をもつまダケやモウソウダケなど、幅のヒゴが加工できる素材に多く見られる技法。しばって固定するものは針金やオオツヅラフジなどの細い蔓が用いられる。



イタヤ細工網代編み見本



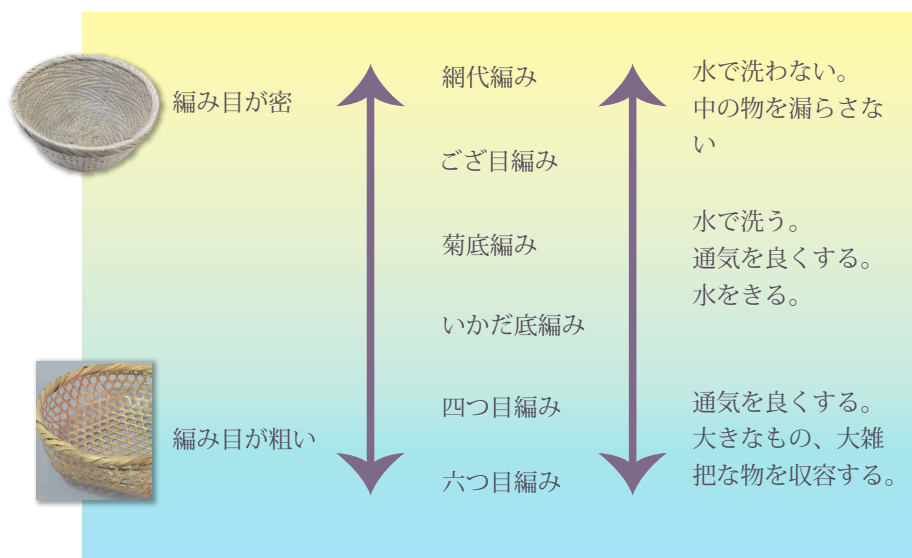
竹細工ござ目編み見本

編組技法 形づくる技術

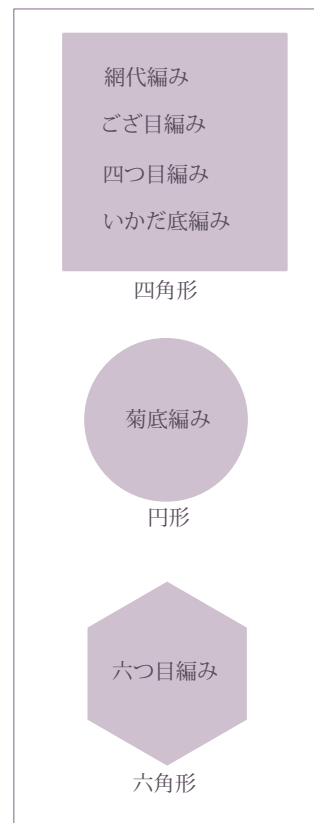
編み目がもつ特徴

編み目の模様や形にはそれぞれ特徴があり、それを使い分けることによって希望の編組品をつくりだすことができます。ものを通したくない場合は目が詰まった編み目を、軽さを求めたり通気をよくするには隙間が大きく空いた編み目を選択します。

性質

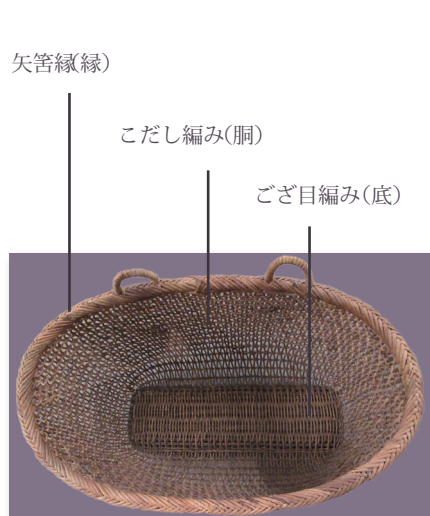


編まれる形

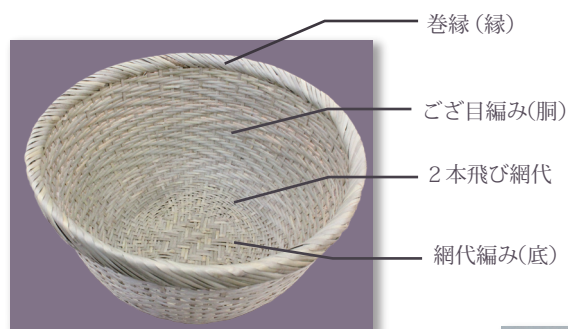


用途によって選択された技法

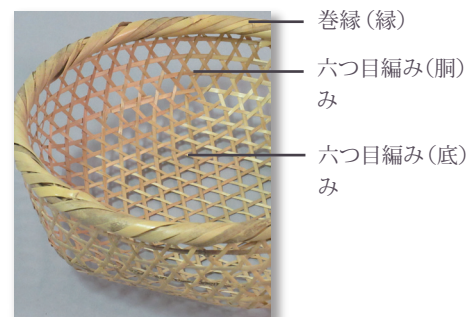
編組品は、編み目をよく観察すると、用途によって「底」・「胴」・「縁」それぞれに適した技法を選択し、組み合わせて作っていることがわかります。編み目のバリエーションは、「底編みの種類 × 胴編みの種類 × 縁巻きの種類」によって示すことが出来、その数は百を超えます。



底と縁には強度を、そして胴体には軽さを求め、山に持って歩くために徹底的に機能を追求した作りとなっている。



隙間から物が出ていかないように、目の詰まった編み方を選択している。



軽さと通気を求める時は、六つ目編みを選択する。

植物には、それぞれ強靱性、割裂性、柔軟性、弾力性など性質があります。かつてはそれぞれの土地の職人が、近隣で採集可能な素材の特質に見合った技術を選択し、編組品を製作していました。

その地域の自然・気候条件によって得られる素材は異なってきます。それゆえ、土地特有の形態や特徴を色濃く持った編組品が生まれるのです。このことから素材と編組技術には、密接な関係があると考えられます。ここでは素材と技術に着目しながら、各地の編組品の一部について紹介します。

岩手県鳥越の竹細工

スズタケは積雪量が75cm未満の太平洋側の地域に生育し、稈の太さは1cmにも満たない細くしなやかなササダケです。

岩手県北部に位置する二戸郡鳥越地域は、古くからスズタケを使った編組品で知られています。その歴史は古く、平安時代にまで遡るといわれています。戦前までは農家の副業として栄え、特に農家の女性は幼いころから竹細工を覚え、家計を助けました。

長野県戸隠の竹細工

戸隠村(現長野市)は標高約1200mの高地にあり、近隣に自生するネマガリダケを素材とした竹細工が盛んに行われました。江戸時代、幕府の役人が村の調査をした際に、生活資源としてネマガリダケを伐採する許可を出したことに始まったとされ、目カゴ、箕、ザルなどの生活用品が古くから生産されました。そばの有名な産地であり、そばを盛るためのザルも江戸時代から製作されていたと伝えられています。

青森県のあけびづる細工

弘前市には、岩木山の豊富な植物資源を利用したあけびづる細工があります。現在でも多くの職人を抱えた工房があるなど、生産が盛んな地域です。特徴は型を使って編み込むことです。サイズによっていくつもの木杵があり、中には分解できるものまであります。明治期には産業として発展し輸出も盛んにおこなわれたことから、装飾的な編み目が多く、美的技巧に優れています。

新潟県佐渡の竹細工

佐渡は昔から竹の産地として知られ、竹細工が盛んでした。古くは弥生時代の出土品から竹ザルが発見され、また江戸時代には竹の民具が大量に島外へ出荷され、佐渡金山奉行の財政を助けたともいいます。

佐渡の竹細工は民具として生まれ、広く島民の日常生活に関わって発達してきました。特に南佐渡にある小木では、昔から良質の竹が取れるため、どこの家でもザルやカゴを編んでいたようです。

高知県土佐の竹細工

土佐市家俊地域では、古くからソーケ、カゴ、ザルなどの竹細工が盛んな地域でした。素材は近隣に自生したハチクやモウソウダケを使用します。採集から加工までは男性、編み上げるのが女性と役割分担しながら、家族で製作を行っていました。

青森県の竹細工

旧岩木町(現弘前市)愛宕地区では、120軒中7割ほどの家々でネマガリダケ細工を副業としていました。採集するネマガリダケは岩木山や八甲田山に豊富に自生した3年生のものを使いました。年間10万個を製作するほど生産は活発で、主力商品はリングカゴでした。20年ほど前から様々な形の編組品にも挑戦するようになりましたが、現在製作を行っているのは2軒のみとなっています。

宮城県岩出山の竹細工

大崎市岩出山の竹細工は、藩政期に下級武士の内職として奨励されたのが始まりといわれています。素材は近隣に自生したアズマネザサの1年生のものを使っています。地元ではシノダケと呼ばれているアズマネザサは、マダケに比べて材質が細くしなやかなのが特徴です。特に岩出山の代表的な製品が米あげザルで、大きさに応じて10種類もあります。

福島県三島の編組品

かつては編組品を製作するのは高齢者の冬の仕事でした。昭和56年(1981)に福島県三島町では、ものづくりの文化を後世に伝えていくために生活工芸運動が起こり、現在でも地域の資源を活かした地域づくりを活発に行っています。奥会津の山間部でヒロロ、ヤマブドウ、マタタビなどを採集し、手さげカゴ、炊事用具、菓子器などが作られています。

岡山県勝山の竹細工

江戸時代末期には生業として竹細工が行われていたといえます。昭和20年頃には、約70人が竹細工に従事していましたが、現在では一人のみとなっています。マダケとオオツツラフジを使い、大ゾーケ、米ゾーケなどを生産しました。男性が製作、女性が販売という役割分担でした。昭和54年(1979)には国の伝統工芸品に指定されています。

沖縄県の編組品

沖縄は高温多湿の環境の中、本州にみられる植物とは全く違う植生が見られます。アダン、月桃、コシダ、トウゾクモドキなど沖縄の人々は、長い歴史の中で編組品に適した素材を見つけ、素材に応じた編み方で生活に必要なものを作ってきたのです。中にはアダン帽子のように産業として発展し、その人気から国外へ大量に輸出された編組品もあります。

大分県の竹細工

温暖な地方に自生する良質なマダケを使った細工が盛んで、室町時代にはすでに地場産業として竹細工の地位が確立されていました。全国でもめずらしく、編組技術を学べる公的機関である竹工芸訓練センターがあり、現在も多くの人が竹細工の技術習得にあたっています。

編組品からみた地域の特徴



大分県



高知県



岡山県



長野県

現在では米を炊飯器で炊きますが、かつて羽釜で炊いた時代には米を研ぐための道具「米あげザル」が必要でした。米を研ぐ以外でも乾物を干したり、麺の水を切ったりなどその用途は幅広く、日本全国どこのお家庭でも必ず見かけるものでした。生活範囲内に自生した植物と土地の生活スタイルに応じて製作されていることから、「米あげザル」は地域文化の特徴を示す指標のひとつとなると考えることができます。

ここでは、全国の米あげザルの形や素材、技術の違いに着目し、それぞれの土地の地域的特徴をみていきます。そこからは、地域の編組品の特色を作り上げた風土や独自の創造性、生活の営みがみえてきます。



富山県



新潟県



福島県



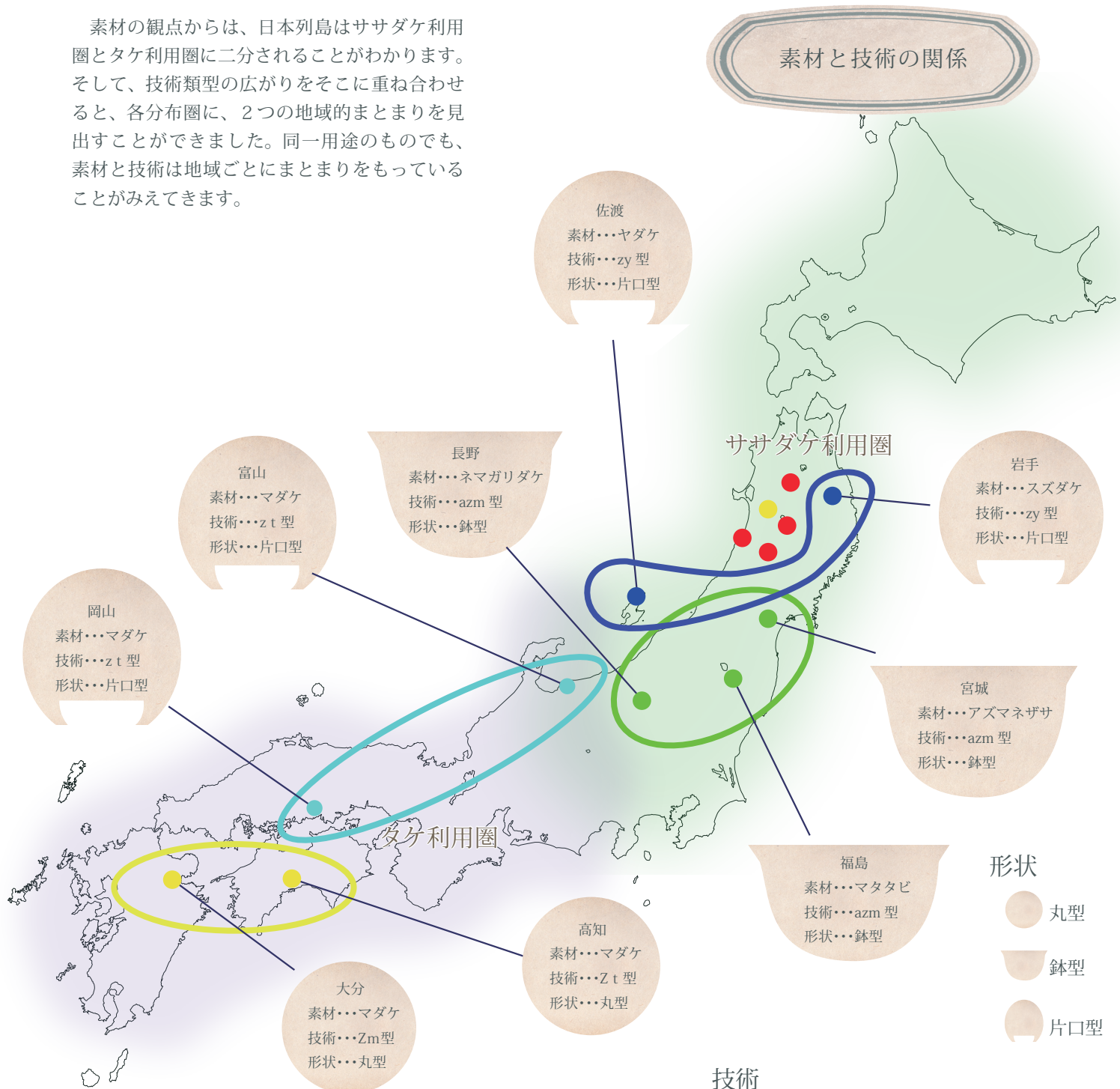
宮城県



岩手県

編組品を素材ごとに技術要素に分解し、 その組み合わせとして、類型的に捉え直す

素材の観点からは、日本列島はササダケ利用圏とタケ利用圏に二分されることがわかります。そして、技術タイプの広がりをもそこに重ね合わせると、各分布圏に、2つの地域的まとまりを見出すことができました。同一用途のものでも、素材と技術は地域ごとにまとまりをもっていることがみえてきます。



技術

中身を編む時の技法、ござ目編み (z)、網代編み (a)、そして縁巻の技法である矢筈巻 (y)、グミ編み (g)、網代編み (a)、巻縁 (m)、当縁 (t) を製作の順番に並べることで、米あげざるを構成する技術を表わします。

- zg 型 (ござ目編み+グミ編み)
- zy 型 (ござ目編み+矢筈巻)
- azm 型 (網代編み+ござ目編み+巻縁)
- zm 型 (ござ目編み+巻縁)
- zt 型 (ござ目編み+当縁)

植生の多様な日本列島では、各地の自生植物を利用して、それに適した技術によって、もしくは社会的・経済的状況に応じて一部改編させながら、編組品が製作されていることが、徐々に明らかになってきました。

秋田県の米あげザル



鹿角

素材…ネマガリダケ
技術…zg 型
形状…片口型

金足浦山

素材…ヤダケ
+
ネマガリダケ
+
アズマネザサ
技術…zm型
形状…片口型

東成瀬

素材…マタタビ
技術…zg 型
形状…片口型

岩城

素材…ヤダケ
技術…zg 型
形状…片口型

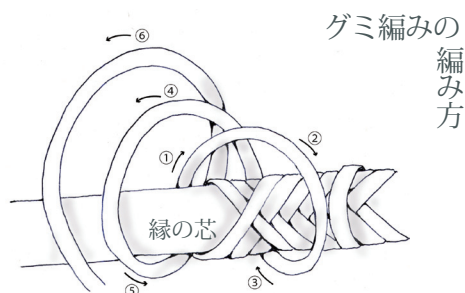
六郷

素材…ネマガリダケ
技術…zg 型
形状…片口型

地域産業と結びついた浦山は、秋田の中で特殊だということが分かります。それは、編組品製作が人間活動であるがゆえ、単純な公式化はできず、その文化的・社会的・経済的背景も加味されて、複雑に絡み合うことで生じたものなのでしょう。

旧六郷町で「グミ編み」、もしくは「たまぐらっこ」と呼ばれた縁の編組技法があります。矢筈巻の上に、一定の間隔で更に巻き締めも施す編み方です。東成瀬村、岩城町亀田、鹿角市草木のザルや鳥海町、象潟町のボーズフゴなど、秋田県内では同様の技法が各地で散見されますが、他県では今のところ見当たらず、技術が県の中だけで広まった可能性もあります。

素材を異にしながらも、縁巻きの技法が同一であるという特徴は、秋田の地域色を強く表しています。秋田の職人は、異なる縁巻きの技法を重ね合わせることで、使用時に負担のかかる縁を破損にくくするという機能面の強化を図ったものと考えられます。そして、さらには装飾的な美しさも兼ね備えた「グミ編み」を考案したのでしょう。



矢筈巻に更に1回転の巻き締めも施しています。



グミ編みのみられるボーズフゴ



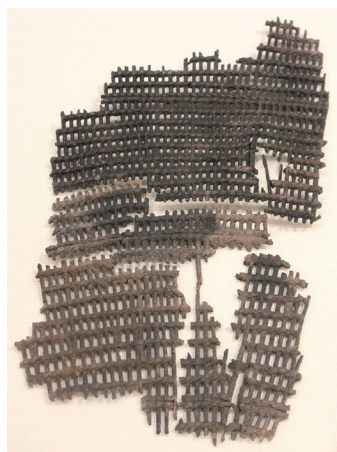
グミ編みのみられる秋田県のザル

秋田県の 編組品の特徴

つな がる 手 仕 事

編組品の歴史は縄文時代にまで遡ることができます。1万年以上前から何世代にもわたって脈々と受け継がれてきた縄文人の自然利用と暮らしの知恵は、その他の出土品とともに編組品に凝縮されて、今私たちの前にあります。私たちはそこからどのようなメッセージを受け取ることができるでしょうか。

現在、かつての生活必需品だった編組品は、社会や産業、生活スタイルの変化によって衰退・消滅しつつあります。一方で、暮らしを彩る道具として編組品を再び生活に取り入れようとする新しい動きがあります。伝承されてきた技術の価値をもう一度見直し、編組品を美的観点から再評価し、生活の質を高めようとするものです。「モノ」から「ココロ」へ。時代と共に編組品の価値は変化してきているのです。



編み物
縄文時代晩期 戸平川遺跡出土

現代における、あけびづる細工の代表的な編み方であるこだし編みと同様の編み目であることが分かります。大きい砲弾形の、かごのようなものの断片で、整った編み目、ヒゴの継ぎ目が表に出ていないことなどから美的な意識のもと制作されたものとも考えられます。

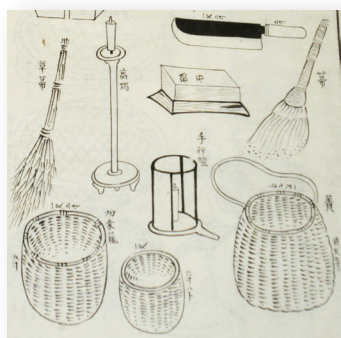


土器底部圧痕
縄文時代後期
長戸呂遺跡出土



土器底部圧痕
縄文時代後期 上谷地遺跡出土

縄文土器は輪にした粘土を積み重ねてならして製作します。このとき、製作しやすいように底に敷物を敷いており、その圧痕は秋田県内ですでにこの時代に、ござ目編み、網代編み、縄目編みなど、今と変わらない編組技術があったことを物語っています。また、土器の中にはカゴを模倣したと考えられるものもありました。私たちの想像以上に、縄文人は植物資源を利用していたのかもしれない。



秋田流養蚕伝来

嘉永6(1853)年に記され、養蚕で使用される用具等を記録しています。桑を入れるカゴや運搬用の道具などについて図解されています。



秋田風俗絵巻(江戸時代後期)

江戸時代の久保田城下及びその近郷の風景、風俗などが11の場面に分けて収録されています。正月の門前に集う人々の様子の中に、腰に帳簿をさげ、魚の商いをしている男の人が描かれています。魚は竹で編まれた籠の中に入っています。



菅江真澄日記
「えみしのさえき」館蔵(写本)

真澄は「サラネフ」と表記していますが、現代のアイヌ語では「サラニブ」といいます。日記の中に「5月2日、(北海道の久遠郡のあたり)にて、アイヌのメノコ(女性)たちがサラネフというものに、様々な草の根を入れて背負ってきた」と記述があります。

現代の編組品

必要の中から生まれた編組品ですが、現代では表現の一つとして独自性を生かした作品へとその姿は変化をみせています。伝統の技にオリジナリティーを吹き込み、現代アート作品へと昇華させるアーティスト、室内装飾やインテリア、ファッションなど装飾デザインからの支持を受け製作する作り手など、編組品が「美」の側面からアプローチされ、時代に沿う形で職人が作家へと変化しているからです。

機能性とデザイン性を合わせ持つ編組品の登場は、編組品の歴史に新しい1ページを加えました。



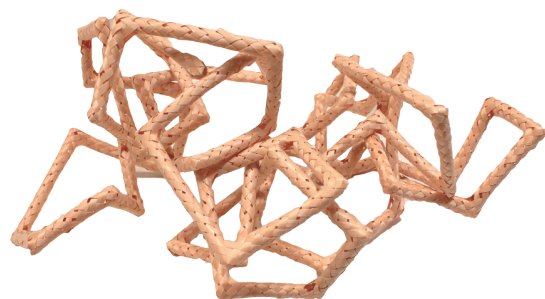
オニグルミのバッグ



イタヤカエデの丸盆



クズのバッグ



ヒノキのテープで作ったアート作品

戦後の経済復興に続く高度経済成長の時代、石炭から石油へのエネルギー転換のもと、重化学工業が発展しました。機械によって大量生産されたプラスチック製品は、安さと手軽さから瞬く間に生活の中へ浸透していきます。

しかし、編組品に取って代わったプラスチック製品を見ると、そこにはタケなどの自然素材のデザインが施されています。機能面ではそうしたデザインは不要なはずですが、人々の心のどこかに自然素材への安らぎがあって、そうした思いがデザインに反映しているのかもしれません。プラスチック製品の中にも編組品が姿を変えて生きているのです。



竹細工のカゴ



編組品の編み目のデザインが残ったプラスチック製品

おわりに

今、もう一度、秋田の植物を編んで作られたザルやカゴなどを、日常生活の風景に取り入れてみるのはいかがでしょうか。

自然から生まれた編組品は、使うほどに味わいを増し、やがて人と同じように老いて土に還っていきます。編組品は暮らしに彩りを与え、心の豊かさや安らぎを得る対象として、その価値が見直されています。その美的な価値や先人から伝えられた技を改めて考えることは、秋田の重要な文化を再発見することにつながります。

(展示担当 斉藤 洋子)

